
ゆきにぼたん

みみずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆきにぼたん

【Nコード】

N7509S

【作者名】

みみずく

【あらすじ】

27歳の牡丹は、女官として王女に仕えている。穏やかな日々に満足しているものの、12の時に別れた弟、幸を忘れることができない。ある日、お見合いで失敗した牡丹は、宮廷の庭園で幸の面影を持つ青年、枯野に出会う。

人生初めての見合いに挑んだ日、私は、ひどく落ち込んでいた。

「いかがでしたか、見合いの首尾は」

待ち構えていた散里様にそう聞かれた時も深々と頭を下げるしかなかった。

「申し訳ありません。しでかしました。100年祭の話題になった
おり、花娘の行列に参加したことをつい口にしてしまいました、その」

「年齢がばれたのね」

散里様の口からため息が漏れた。

「本当に申し訳ありません。散里様に紹介頂いた縁談だったのに」

「仕方ないわ。年齢を誤魔化そうと言ったのは、わたくしですから。
でも、良いお相手だと思ったのですけどね。最近の男性は、了見が
狭いのかしら」

「誰だつて、27歳を20歳と偽られたら、引きますよ」

散里様は、「そうかしらねえ」と言いながら、白魚のような美しい
手で私の手を握った。

「落ち込むことはないわよ、牡丹。わたくしがきつと、もっと良い
縁談を見つけてあげますからね」

「まだ諦めないのですか」

「もちろん。だって、わたくしの夢は、牡丹の子供を甘やかすこと
ですからね」

散里様は、にっこり笑った。

「少し出てきます」

私はそう言つて、散里様の部屋を出た。

肌寒い回廊を体を縮めて歩いてみると、一層惨めな気持ちさがこみ上げてきた。

私は、今年で27歳になる。我が国の女性の婚期は18歳から20歳までだといわれるので、もう行き遅れ以外の何者でもない。散里様は、年を誤魔化して見合いすればいいとおっしゃったが、今回のことで上手くいかないことがよく分かった。無理して、結婚などしなくともいいのではないかと思う時もある。

実際、現在の生活には、満足している。ずっと散里様にお仕えしていくのも悪くないと思う。散里様という、素晴らしい主がいるだけ、自分は幸せなのかもしれない。

でも、こんな寒い日になると、かつて手放した小さなぬくもりを思い出すのだ。たとえば、結婚したら、あのぬくもりを取り戻すことができるのだろうかとか、つい考えてしまう。結婚適齢期に意地を張って、見合いをしなかったのは、他でもない自分なのに。我ながら、往生際が悪くて、嫌になる。

とりとめのないことを考えていると、窓越しに外に降り積もった雪が日光に反射してきらきらと光っているのが目に入った。雪を見ると、私はいつだって過去へと引き戻されるのである。

私の故郷は、雪深い山村だったので、冬の間は家の中で冬が過ぎ去るのをじっと待っていなければならなかった。私は、母親と弟の幸と3人で暮らしていた。幼い私は、元気があり余った子供だったから、よく夜更かしをしていた。窓越しに降り積もり雪を眺めながら、春が来るまで長い夜を何度も明かした。

母親と最後に言葉を交わした夜も普段と変わらない、雪が降り積もる音が聞こえるほど静かな夜だった。母親は、幸の小さな頭を愛おしげに撫でながら、珍しく夜更けまで起きていた。

母親の顔は、雪のように白く透き通っていた。

私は、幼いながら、母親と過ごす夜は、これが最後であろうことを察していた。

きつと、ひどい顔をしていたのだろう。

母親は、弱弱しく微笑みながら、私をたしなめた。

「女の子は笑っていなくてはだめよ」

小さく頷き、笑おうとしたが、どうしてもできなかった。

「私、できない」

泣きわめいて、それから抱き締めて甘やかしてほしいと思っていた。大きな不安に飲み込まれそうだった。

母親を失うなんて。

そんなことに耐えられるだろうか。

母親は、私の手を取ると、強く握った。

「幸にこれからも優しくあげて。この子を守ると約束して」

母親の言葉は、容赦なく私の心を刺したけれど、母親を悲しませたくなかったので、微笑んでみせた。

「安心して。どんなことがあっても守るから」

母親は、安心したように大きく息を吐くと、枕に頭を戻すと、目を閉じた。

次の朝、冷たくなった母親の枕もとで目覚めた私は、やっと涙を流すことができた。

もうずっと前の話だ。

涙はとうに枯れ果てて、長い月日が流れ、今は時折こうして母親の最後を回顧するだけだ。27歳の私は、約束を反故にして素知らぬ顔で、のうのうと生きている。見合いに失敗して人気のない宮廷庭園に向かっているのは、人知れず泣くためではない。今の私を見たら、母親は、罵るにちがいない。

冬のこの時期、草木が枯れた庭園は、侘しいことこの上ないのが常だが、すっかり雪化粧された今日の庭園は、明るく華やかに見えた。しかし、それどころではない私は、風情のある雪景色を素通りした。宮廷は広しといえども、庭園の端に忘れられたように存在する涸れ井戸を使っているのは、私くらいなものだろう。宮廷に入って以来、私は、その井戸に向かって人には言えない言葉を吐き出し続けてきた。積もった雪をどけて腐りかけた木の蓋を取った私は、真っ黒な井戸の底に向かって思いの文をぶちまけた。

「なあにが、『僕は正直な女性が好きなんです』よ。本当の年齢言ったら、誰も見合いなんてしてくれないの。こっちの事情も知らないくせに押しつけがましい正論を言わないでよ。大体、あんたこそ、本人のいないところで馬鹿にするくらいなら、『年増は嫌だ』って正直言えばいいじゃない。」

上品な宮廷の人々が聞いたなら、卒倒してしまうかもしれない。そう、誰かに聞かれたら、大変なことになる。

分かっていたはずなのに私はどうも気が緩んでいたらしい。私は、周囲の人気を確かめもせず、さらに続けた。

「私だって、無神経で偽善者ぶった男は、お断りよ。あんたみたいな男に蔑まれるなんてゾツとしたんだから。行き遅れだって、ブライドくらいあるんだから。馬鹿にしないでよ。あんたなんて、親の財産食いつぶして、一文なしになっちゃえばいいんだ。もう、なによ。なによ。なによ。なによおーーーー」

「なによー。なによー。なによーーーー」

絶叫は、井戸の中でむなしく反響する

それは、きつと力を持たない呪いの言葉。

肩で荒い息をしていた時だった。

「ぶは」

小さな、でも確かな、誰かが吹き出す声が聞こえた。

私は、凍りついた。

「そこに誰かいらつしやるのですか」

聞き間違いであつてほしいと全力で願いながら、声を掛けたが、私のささやかな願いは聞き届けられなかったようだ。

生垣の後ろから姿を現したのは、成人したばかりであろう青年だった。

私よりも頭二つ分高いところにある切れ長の目は、愉快そうに細められている。

顔から火が出るかと思った。

最も聞かれたくない相手、つまり若くて自信に満ち溢れた男に私の恨み言は聞かれてしまったらしい。

青年は、さも可笑しそうに喉でくつくと笑っていた。

私は、息も出来ず、その場に凍りついていた。

頭の中は目まぐるしく、どう誤魔化そうか、言い訳を考えていたが、混乱しすぎて、考えをまとめることすらままならない。

最初に口を切ったのは、青年の方だった。

「そんなに怯えなくてもいいよ。俺、誰にも言わないから」

青年は、必死に笑いを堪えようとしているのか、口元を歪めながら言った。

「ありがとうございます。どなたか存じませんが、お耳を汚すようになつまらないことをお聞かせしてしまい申し訳ありませんでした。どうか、お忘れください。では、失礼します」

破れかぶれに言った私は、踵を返して逃げようとした時、青年がまた口を開いた。

「おばさん、先週も来てたよね」

私の足は、ピタリと止まった。

今の言葉は、私に向けられたものだろうか。

早く逃げればいいのに、振り返った私の口は勝手に動いた。

「おば、おば、おばさんて、私のことですか」

「うん。他に誰かいるの」

青年は、頷く。

「私、まだ27なんですけど」

「それが何」

青年は、きょとんとした顔で私を見返した。

「私は、おばさんじゃないです」

「呼び方なんて、どうだっていいでしょ」

「私にとってはどうでもよくないです」

恥ずかしくて逃げたい心とは裏腹に私の口からひとりで言葉が出てきてしまう。

我ながら、情緒不安定だ。

その時、青年は、少しぎょっとした顔で私を見た。

「おばさん、どうしたの。泣いてるけど」

「へ、まさか」

慌てて頬に手を当てると、本当に生温かいものが伝っていた。

王宮に来て10年、泣いたことなんて一度もなかったはずの私が、なぜか見ず知らずの青年の前で泣いていた。

涙は後から後から溢れてきて、私は、鼻をぐずぐずいわせながら、泣き続けた。

青年は、困惑した様子で号泣する私を黙って見つめていた。

どれくらいの時間が経ったのか分からないが、突然ひんやりとしたものが私の頬に触れた。

雪が降り出したようだ。

隣に立っていた青年も雪に気付いて空を見上げた。

真っ白な玉は、灰色の空からぱたぱたとこぼれおちてくる。

その時、青年が囁くように言った。

「牡丹雪。こういう大粒の雪をそう呼ぶんだって聞いたことがある

んだ。なんかいいよね」

私は、大きく瞬きをして、青年を見上げた。
雪はいつだって私を過去へ引き戻す。

こういう大粒の雪を牡丹雪って呼ぶんだってさ
僕の名前に姉ちゃんの名前がくつついてるんだよ
ずっと一緒にいたいでなんかいいよね

違うよ、幸

牡丹雪は水っぱいから、すぐ溶けちゃうんだよ
幸のゆきは、幸せのゆき
雪じゃないんだよ

「あなたは、誰。幸を知っているの」
青年が振り向く。
私は、答えを待つ。

「ゆきつて、雪のことじゃないよね」

やけに長い沈黙を破って飛び出した的外れな言葉に私は戸惑った。

もしかしたら、目の前の青年は本当に幸を知っていて、ただ素知らぬふりをしているのではないだろうか。

15年間ずっと幸の消息を知るわずかな手がかりすらつかめなかったせいか、根拠のない期待と激しい焦りに駆られていてもたってもいられなくなった私は、青年に食ってかかった。

「幸は私の弟です。15年前から会っていませんけど、ずっと探しているんです。牡丹雪のことを話していた時のあなたは、幸と重なって見えました。牡丹雪は、私達の故郷の言葉なんです。宮廷の人々はほとんど知らないはず。もし、あなたが幸をご存知なら、教えてください。あの子は、どこにいますか」

残念だけど、と青年は言った。

「幸という名の人は知らない」

「でも、どうして、牡丹雪のことをご存知なんですか」

「なにかの本で読んだんだよ」

「でも、」

どうしても納得できなくて、納得したくなくて、私は言葉を探した。すると、長い腕が伸びてきて、私の頭に積もった雪を払った。

反射的にびくりと震えると、青年は、フツと微笑んだ。

「雪だるまになってしまっから、もう行くよ」

そう言っただけを返した青年は、ふいに振り返って私を見た。

「俺の名前は、枯野。よろしく、おばさん」

青年が雪を踏みしめる音が聞こえなくなるまで、私はぼんやりと佇んでいた。

「まああ、牡丹。酷い顔ですよ」

庭園から戻った私を見た散里様は仰天した。

「ご心配には及びません。元々、大した顔ではないですから」

「冗談を言う必要はなくてよ。まあまあ。こんなに目を腫らして体も冷え切っているじゃないの。外で泣いていたのね。お茶を飲んで温まりなさい。さあ、ここに座って」

散里様は、私を暖炉のそばの椅子に座るよう命じると、自分も近くの椅子を引き寄せて腰掛けた。

「あなたが泣くなんて。見合いのことがよほどショックだったのですね」

「縁談を持ってきたわたくしの責任ね」と散里様が言うので、私は首を横に振った。

「違うんです。泣いたのは、ちょっとしたはずみで。むしろ、たくさん泣いてすっきりしたくらいです」

「だったら、どうして悲しそうな顔をしているのです」

「幸に、弟に似た人に会いました。知り合いかもしれないと思ったんですけど、思い違いだったみたいです。馬鹿みたいですよね。15年も経っているし、幸は私のことなんて覚えていないかもしれないのに」

「それでも忘れられないのね」

そう呟いた散里様は、どこか遠い目をしていた。

きつと、亡くなった旦那様のことを考えているのだろう。

散里様の旦那様である弓張様は、我が国にこの御方ありと称えられていた將軍だった。

王女である散里様に身分違いの恋をした弓張様の熱烈な求婚は、彼が亡くなった今も宮廷の語り草になっている。

私は旦那様に会ったことはないが、散里様は、時折懐かしそうに旦那様との思い出を語る。

「一生忘れることなどできないのでしょうね」と以前散里様は言っ

たことがある。

私達は、涙が枯れてしまえば、消えない記憶にすがりつくしかすべを持たない。

それきり黙って、暖炉の中で赤々と燃える火をいつまでも眺めていた。

明くる日、朝から熱を出したため、散里様がわざわざ御医者を呼んでくれた。

お昼頃やってきたのは、宮廷医の中でも一番若い瀧先生だった。

瀧先生は、私の数少ない友人の一人で、宮廷に入って間もない頃から交流がある。

当時まだ医学生だった瀧先生は、庶民の出のせい、よく医学仲間にかかわれていた。

人見知りの激しい上に垢ぬけない田舎者の私もまた、女官の中でつまはじきにされていたから、私達は、なんとなく仲間意識を持ったわけだ。

瀧先生のふわふわした髪を見た途端、私の鼻がむずむずし出した。

「へつくしゅん。ぶつくしゅん。へつぶしゅん」

「なんか、変なくしゃみだね」

瀧先生は、鞆から診察器具を取り出しながら言った。

「一発目で止めようとすると、変な音になっちゃうんですよ」

「我慢しない方がいいよ。くしゃみは、体内の悪いものを出す反応でもあるわけだから。はい、口開けて」

瀧先生は、持ち前ののんびりした口調で言うと、私の口を開けさせた。

「そつえば、お見合いしたんだって」

「ひょーしてひってるんへすか」

「医局の先生達は皆知ってたよ」

「ひゃあ、ひゅうていしゅうがひってるってこひやないでひゅか」

瀧先生は、私の口を閉じさせると、上着をめくって、腹に聴診器を当てた。

「相手の男性が言いふらしているらしいよ。年齢詐称したって、本当なの」

思わず「うう」と唸ったら、「お腹痛いの」と聞かれた。

「お腹じゃなくて、頭が痛いんです。どうせ、私は、年齢詐称してお見合いしたおばさんですよ」

瀧先生は、「ははっ」と笑うと、聴診器を耳から外した。

「牡丹さんがおばさんだったら、僕もおじさんだよな」

「瀧先生は、男だからいいですよ。年食った分だけ社会的信用が上がるんだから。その内、可愛い年下の女の子と結婚できるわけだし」

「それは、どうだろう。ほら、僕は庶民の出だから。野心家ぞろいの宮廷の女性にはもてないわけ」

「お互い苦労しますね」

「まったくだ」

瀧先生は、掛け布団を私の首元まで引き上げると、布団の上からポンポンと叩いた。

「風邪は、寝るのが一番だよ。薬は、朝晩食事の後に飲むといい」
出て行こうとした瀧先生を私は「ちよつと待って」と呼びとめた。

瀧先生は、不思議そうに振り返った。

「瀧先生は、枯野っていう人をご存知ですか」

瀧先生は、しばらく首を捻った後、「ああ」と呟いた。

「日永様の御子息がそんな名前だったな。ずっと外に出ていたみたいだけど、最近宮廷に戻ってきたと聞いたことがあるよ。面識はないけど」

「日永様って、たしか宰相様」

何も知らない瀧先生は、「うん、そー」と可愛らしい仕草で頷いた。
平静を装って「へえ」と言ってみただけで、心臓がバクバクして、

冷や汗まで出てきた。

「ありがとう、瀧先生」

なんとかお礼を言っていると、瀧先生は、眼鏡越しにふにやっと笑い、ドアを静かに閉めて出て行った。
なんてことだ。

年齢詐称の見合いだけでも十分笑い者なのに、よりにもよって宰相様の息子に愚痴を聞かれてしまうなんて。

後に残された私は、自分の犯した失態を思い返して悶絶することになる。

三日間寝込んだ風邪休み明けの仕事は、きついものだ。
体のあちこちが軋み、散里様の昼食を乗せた盆を運ぶことすら、億劫になる。

散里様の部屋に向かって、よたよた歩いていると、数人の女官達とすれ違った。

地獄耳というわけでもないが、自分のことを言われていると、勝手に耳に入ってきてしまう。

「やだ、あの方でしょう。例の見合いの」

「そうそう。散里様のお氣に入りの」

「いつも澄ましているのに人って分らないものねえ」

「しつ。おやめなさい。きっと切羽詰まっていたのよ。御歳も御歳だから」

リーダー格の女官の一喝で他の女の子達は静かになったけれど、庇われた私は、ちっとも嬉しくなかった。

なるべく人気のない道を選んで、散里様の部屋に着くと、散里様は、昼寝中だった。

テーブルに運んできた昼食の品を並べてから散里様の部屋を出たところで、名前を呼ばれた。

「牡丹さん。牡丹さん。牡丹さ〜ん」

——耳の悪いお年寄りではないのだから、3度も呼ばれなくても聞こえている。

卑屈な気分で振り返ると、女官服に身を包んだお団子頭の少女が駆け寄ってきた。

少女の名前は、玉苗といい、女官見習いである。

散里様に仕えているが、まだ見習いなので、午前中は他の女官見習いと共に宮廷の行儀作法を学び、午後から仕事を始める。

人付き合いが苦手な私だが、玉苗とは相性が合うようで、上手くいっている。

自分の意見をはっきり言う子なので、一緒に仕事をしやすい。

散里様にも気に入られているようだから、来春の除目で正式な専属女官になると思う。

「ちゃんと聞こえています。それから、玉苗さん。回廊を走ってはいけません」

「承知しています。でもね、悪いとわかっていることをついしちゃう時は誰にだってあるでしょう」

私の腕をがっちりと掴んだ玉苗は、花のような笑顔を浮かべた。身に覚えのある悪寒が背筋を走った。

「牡丹さんてば、風邪でずっとお休みしているんですもの。今日はお見合いのこと、洗いざらい話してもらいますから」

無邪気な美少女の皮を被った悪魔は、有無を言わず、私を食堂へ引きずっていった。

人を巻き込むこの好奇心さえなければ、と思う。

年長者として、威厳に欠ける自分が情けない限りである。

「大食堂へ行くのが嫌だ」と言うと、案の定、玉苗は不満そうな顔をした。

宮廷には、大食堂と小食堂の二つの食堂がある。

お昼時だけ開く大食堂は、料理の数が多く、大勢の人で賑わう。

私だって、普段なら、大食堂に行きたいところだが、見合いの話が宮廷中に広まった今、注目を浴びるような所にむざむざ行くのは御免である。

結局、玉苗に杏仁豆腐をご馳走することを約束し、私達は、小食堂

に行くことになった。

小食堂は予想通り閑散としていて、昼時だというのに私達以外のお客は、衛士のおじさんと老医師だけだった。

やれやれと思いながら、蕎麦を注文していると、二人組が入ってきた。

瀧先生、それにもうひとりも顔なじみである。

ふたりは、私と玉苗に気付き、近づいてきた。

「大分良くなったみたいだね」

瀧先生は、自分も蕎麦を注文してから、私の隣に座った。

「風邪は治っても、噂は治まらず」

瀧先生と連れ立ってきた青年は、憎らしいことを言いながら、玉苗の隣に腰を下ろした。

「勝手に始めないでよ、梧桐。その件に関しては、私がじっくりと聞きだそうと思っているんだから」

玉苗が文句を言うと、梧桐は、馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

梧桐は、かなりの皮肉屋だが、幼馴染の玉苗相手だとさらに感じ悪くなる。

こんな性格でも国軍の中では出世株と聞くから、男性社会とは思議なものだ。

「じっくりも何も。牡丹さんが年偽って見合いしてばれたってだけの話だろう」

しれつと言い放つ梧桐を玉苗が睨んだ。

「本当は違つかもしれないでしょ。見合い相手の悪口言いふらすような男だよ。牡丹さんにふられた腹いせであることないことを言いふらしている可能性だってあるじゃん」

——若さの素晴らしさよ。

穴があつたら入りたい、と改めて思う。

玉苗の暴走気味な思考を愛おしく感じつつ、恨めしいと思う今日の頃。

そんな胸中とは裏腹に、私は、他人事のような顔をして、十代の諍

いを眺めていた。

「ふたりとも、やめなよ」と瀧先生。

「ズズズッ」

私は瀧先生の心遣いをぶち壊すように大きな音を立てて蕎麦を啜ると、パチンと箸を置いた。

「私は、年齢を偽ってお見合いをしました。結果、嘘の皮が剥がされたわけです。私も恥を知っているつもりですから、金輪際、年を偽った見合いなどしません。以上」

発言後の反応は、三人三様だった。

瀧先生は、ちよつと安心したような顔をした。

梧桐は、「女つて大変だな」と彼には珍しいことに慰めの言葉をくれた。

玉苗は、驚いた後、でも、と言った。

「悪いとわかつていることをついしちゃう時は誰にだってあるですよ」

玉苗はそう言つて、にっこり微笑んだ。

花のような笑顔だとまた思った。

気を取り直した玉苗は、私の見合い相手について根ほり葉ほり聞きはじめた。

答えられることは答えて、答えられないことは答えなかった。

私が自分の言葉で語り、その言葉に耳を傾けてくれるのは、宮廷では多分散里様と彼ら三人しかない。

それが私の小さな世界であつて、私の生きてきた道なのだと思う。

恥ずべきものではなく、居心地良く感じることもある。

それでも、幸に会いたいと思う。

一目でいいから、幸せに生きている姿を見たいと思つてしまふのだ。

もしも、会えたら。

そしたら――

「何が、『そしたら』なの」

日干しているカーテンの隙間から急に現れた人影を見て、私は、「わあ」と叫んだ。

「大丈夫、おばさん」

吃驚した拍子に尻もちをついた私の前に青年は、しゃがみ込んだ。

枯野と名乗った青年。

幸に少し似た人。

でも、宰相様の息子だ。

関わらない方がいいと警告する心の声に従って、私は、女官の作法としては少々機敏すぎる動作で立ちあがった。

軽く頭を下げて歩き出すと、枯野は、なぜか私の後をついてきた。引き離そうと足を速めても、身長差があるせいか、すぐに追いつかれてしまう。

「井戸に來ないのって、俺のせいでしょ」

「涸れ井戸に用がある人なんていませんよ」

「おばさんは、あるよね。叫んでた」

「あの時はどうかしていたんです」

「ね、おばさんて、いつもそうなの」

「どういう意味でしょうか」

「いつも背筋正して神経張ってる。突然ブツンと切れる。だから、あんな風にひとりで怒鳴ったり泣いたりするんだらうね」

立ち止まって振り返った私の顔は、熟れた林檎みたいに真っ赤になっ
っていたと思う。

考えるよりも先に口が動いて、喉が震えた。

「知ったふうな口利かないください。あなたに何が分かるの」

初めて人を怒鳴った。

たったの二度しか顔を合わせたことがないのに、私は、この男の前で泣いたことすらあるのだ。

このとき、その後に起きることを知っていたら、私は枯野を怒鳴らなかつただろうか。

答えは、否だ。

たとえ知っていても、私は、怒鳴ったはずだ。

どちらにせよ、27歳まで知らなかつた自分の激しい感情に振り回されていた私には、幸と私の見えない距離が急速に縮まっているなど、このときは知る由もなかつた。

3 (後書き)

かつこよさそうなので、章をつけてみました。
1、2話の内容は変わっていません。

私の主、散里様は、とても美しい女性である。

色白で、すらりと背が高い散里様は、華やかなドレスがよく似合う。新しいドレスを試着する散里様をお手伝いするのは、私の密かな楽しみなのだ。

大きく背中が開いたベージュのイブニングドレスを着た散里様を前に思わず感嘆のため息が漏れた。

「いいです、散里様。肩ひものない型にして正解でしたね。ああ、腰回りを詰めた方がいかもしれません。髪飾りは、藤と竜胆のどちらに致しますか。夜会は、明後日ですから、ティアラと一緒に磨きに出そうと思っていますよ」

散里様は、ちょこまか動き回りあれこれ言う私をちらりと見て、「元氣そうでよかったわ」と言った。

「昨日カーテンを取りこみに行っただけと思ったら、この世の終わりみたいな顔で帰ってきて、宰相殿の御子息を怒鳴ってしまったなんて言うんですもの。驚きましたよ」

身分が上の人間を怒鳴るなんて、普通だったら、即免職、少なくとも停職になるだろうけれど、お呼び出しがかかっていないので、宰相様の息子は誰にも言っていないのだろう。

私は散里様にすぐ報告したが、散里様は、可笑しそうに笑っただけで、何のお咎めもなかった。

散里様は、つくづく私に甘いような気がする。

「朝起きたら、この世が終わっていたらいいのと思っていただけですけど、やっぱり終わっていなかったなので、切り替えることにしました」

「それにしても、あなたが怒鳴るなんて。枯野殿がどんな方なのか気になるわ」

「私は、もう会いたくないです」

きっぱり言い切って、散里様のドレスを脱がしにかかる、散里様は、「あら」と言った。

「忘れるところでした。明後日の夜会は、あなたも正装してもらうつもりですからね」

「ええっ？それだけは、勘弁してください。今はあまり人の集まる場に出たくないです」

首を激しく横に振る私を見て、散里様は、眉をひそめた。

「いつまで隠れているつもりですか。あなたは、わたくしの母親の従妹の息子である男爵の姪で、伯爵の娘なんですよ。少しは貴族らしい振舞いをしなさい」

散里様は、私自身すっかり忘れていたことを持ちだした。

宮廷ではほとんど知られていないが、散里様と私は、ものすごく遠縁の親戚なのだ。

私の身分は一応貴族だが、小さな山村で育ち、伯爵である実の父親にすら会ったことがないので、自覚が全然ない。

「でも、」

「心配ありませんよ。今回は、仮面舞踏会ですから、誰もあなただつて気付きません」

散里様は、いつになく強い口調で私に言い募った

「だったら、出席する意味ないのでは」

「いいですか、牡丹。これは、命令です。舞踏会に出て、殿方とダンスを踊りなさい」

仮面舞踏会という名の見合いに私の強制参加が決まった瞬間であった。

部屋でドレスに着替えていると、玉苗がやってきた。
玉苗は、私を見ると、一瞬ほかんとした。

「うわあ。牡丹さん、化けましたね。実はスタイル抜群だったんですね」

胸元のリボンが上手く結べずにいると、玉苗が傍にきて、綺麗に結んでくれた。

「化粧もやってあげます」と玉苗は言った。

今時の若者らしく、玉苗は、手際よく私の顔に化粧を施していく。

「肌も綺麗だな。雪国出身だからかな。牡丹さんのお見合い相手は、惜しいことしましたよ」

「もう、見合いの話はいいです。散里様も一体何を考えていらっしやるのやら」

髪を丁寧に梳きながら歩いていると、玉苗がずいと身を乗り出した。

「私思ってたんですけどね。散里様は、きっと本気で牡丹さんを結婚させようと考えているんじゃないでしょうか。だから、後任として私を呼んだのかも。だって、今まで牡丹さんひとりしか専属女官がいなかったでしょう。それに、私ずっと気になっていたんですけど、牡丹さんで、どうして今まで結婚しなかったんですか。17歳から宮廷にいたなら、たくさん縁談の話があったと思うんですけど」

鏡越しに問われた時、私はついにきたか、と思った。

「勿体ないけれど、断っていたんです」

玉苗は、「ええ。なんでですか」と不満げな声を上げた。

「別にどうしても断らなければならぬ理由はありませんでした。ただ、まだ結婚できないと思っていました」

正直な玉苗は、「全然気持ち分らないです」と言っただけで顔をvertedした。

まあ、私が自分の事情を少しも話さないからだろうけど。

「私だったら、求婚されたら、今すぐにでも結婚しちゃうかもなの」

ないと思う。

誰でもいいというわけではない。

玉苗は、唯一その人に言ってほしいのだ。

少なくとも、17歳の私が結婚したくないと思っていたのと同じくらい強い気持ちでそう願っているはずだ。

10年経って、私の気持ちはだんだんと弱くなっていった。

玉苗の気持ちがそんな風になる前に彼女の願いが叶うといい。

彼女の願いを叶えてあげてほしいと思う。

「終わりましたよ。んゝ美しい。やっぱり私の腕は最高ですね」

私は、得意げに笑う玉苗を眩しげに見た。

仮面舞踏会。

文字通り、仮面をつけてダンスを踊るわけだが、全く奇妙な風習である。

宮廷で開かれる仮面舞踏会は、本当の名前を名乗らないという暗黙のルールがある。

もちろん、単なるルールであって、個人の間で名前を交換する場面もあるようだ。

一種のゲームのようなものだろう。

「白百合の君」と呼びかけられた私は、最初自分のことだとは気付かなかった。

たしかに私は白いドレスを着ていたけれど、私の名前は牡丹だ。牡丹を百合と呼ぶなんて、変な話だ。

ところが、ダンスを申し込んでくる人は皆揃って、私を「白百合」と呼んだ。

しまいには、うんざりしてしまい、テラスで葡萄酒をがぶがぶ飲んでいると、誰もダンスを誘いに来なくなった。

目を瞑って楽団の音楽に耳を傾けていたら、誰かが近づいてくる気配がした。

身構えたけれど、その人物は、私を「白百合の君」と呼ばなかった。「おばさん、酒好きなんだね」

出た！と一瞬思う。

慣れ慣れしい口調ですぐに誰なのか分かってしまう。

でも、私は、声なんか出していない。

「どうして、私だってわかったの」と問いかける。

「わかってしまうんだよ」と答えが返ってきた。

この男は、怒鳴られても懲りないのだろうか。

——それとも、報復に？

目を開けると、顔の上半分を銀色の仮面で覆った青年が、半歩も離れていない所に立っていた。

居た堪れなくて、後ずさりしようとしたけれど、相手も近寄ってくるので、背中が柵にぶつかってしまった。

ごつごつした指がドレスに覆われていない胸元に伸びてくる。

テラスに置かれた松明の火が仮面の隙間から見える切れ長の瞳に映ってゆらゆらゆれる。

吹きつける風のせいで肌寒いくらいなのに、私の体は燃えるように熱く、喉はカラカラに乾いていた。

葡萄酒を飲んだせいだろうか。

触れるか触れないかという時、枯野が囁いた。

「ドレス」

「え」と言うと、目が愉快そうに細められた。

「ドレスが汚れてしまうよ」

枯野は、私の手の中で葡萄酒がこぼれるくらい傾いていたワイングラスを奪いとると、残っていた葡萄酒を薄い唇の間に流し込んだ。

「旨いね、これ。宮廷の葡萄酒は上質だ」

呆気にとられていると、枯野は続けた。

「おばさんが口をつけたものだからかな」

私は何て言ったらいいのかわからなかった。

そもそも、目の前の男は、何をしたいのか、さっぱり分らない。

「そ、それ。あげます」

私はそう言い残して、脱兎のごとく逃げ出した。

胸がざわざわする。

別に触れられたわけでもないし、ただ少し言葉を交わしただけだ。
ダンスのあいだじゅう、相手の男性から腰に手を掛けられるの
で、普通のことだ。

けれど、なぜだか、私は、ダンスを踊った男性達よりも彼の方が
ずっと怖かった。

若くて自信過剰で、でも、きつと何も理解していなくて。

それなのに何もかも見透かしたように私を見る細い目が怖かった。

ドンッ

ホールを出て回廊に続く角を曲がった時、反対側から歩いてきた人
と肩がぶつかった。

「ごめんなさい」

音を立てて床に落ちたヴァイオリンを慌てて拾い上げ、楽器を落と
した楽団員に手渡すと、私は逃げるようにその場を離れた。

相手の顔を見て、謝る余裕すらなかった。

私が枯野の意図不明な行動に動揺して逃げ出した頃、仮面舞踏会のホールではまことしやかな噂が広がっていた。

宮中のざわざわした雰囲気になって、見習い仲間とよく噂話に花を咲かせている玉苗にそれとなく聞いてみた。

玉苗は、宮中を騒がす噂をさほど興味なさそうな様子で口にした。

「なんでも、国王陛下が近々退位する意向を匂わせたと側近のひとりが言ったとかいう話ですよ」

玉苗の言葉は聞いた私は、かなり吃驚した。

10年宮廷にいる身なので、権力争いの構図について多少の知識は持ち合わせている。

第一王子が東方へ遠征していて、第二王子が病の床に臥せっている今の時期に国王陛下がわざわざ退位に関する発言をするなんて、奇妙な話である。

第三王子は、まだ10歳になったばかりなので、王座に座る資格はない。

誰かが思惑を持って流した噂なのだろうが、不穏な空気が漂い始めているのは確かなようだ。

王族全体に関わる大事になれば、私達も巻き込まれる可能性がある。降嫁したとはいえ、散里様は、王族であることには変わりない。

「噂が真実なのか私達には判断出来ませんが、当分は気を引き締めた方がいいかもしれませんね」

私が言うと、玉苗は、「はいっ」と元気よく返事をした。

——言ったそばから、何だろっ、この状況は。

見合いをして以来、私の平穏な生活は失われつつある。

今、私は、かなりまずい場面に直面している。

仮面舞踏会でダンスを踊った橘公爵に「白百合の君」が私だったことがばれたのだ。

橘公爵は、私の手を取ると、舞踏会の夜にしたように指先に口づけた。

「あなたが、白百合の君だと気付いたのは、おそらく私だけでしょ
うね。どうか、あなたの正体を見破った褒美をください」

思わず鳥肌が立った私は、パツと手を引っ込めた。

申し訳ありませんが、と私は言った。

「私などが差し上げることができるものなど、なにひとつありません」

「冷たいですね、白百合の君。あなたは、私と二度も踊ったのに」
橘公爵は、にやにや笑いながら、私の腰に腕を回した。

なんと逃れようともがいたが、公爵の腕はびくともしない。

「窮屈な女官服に隠れた本当のあなたは、実に艶めかしい」
舐め回すような視線が私の体を這いまわる。

公爵の手が上着のボタンに伸びてきたので、私は、慌てた。

「どうかお戯れはおやめになってください。私のような女官と公爵
様では身分が違いすぎます」

公爵の手が止まったので、ほっとしたのも束の間だった。

「ハハハッ」

公爵の口から不快な笑い声が漏れた。

「あなたのような年の女性がそんなことをおっしゃるとはね。いい
ですか。私が求めているのは、大人の関係ですよ。お分かりになる
でしょう」

さも当然という顔で言う公爵を私は絶句して見つめた。

公爵の好色そうな目が近づいてくる。

「堅苦しいことは抜きにして、お互い楽しみませんか」

公爵の手が私の上着に触れたときだった。

「牡丹殿。どこにいらっしゃいますか。散里様がお呼びです。牡丹殿」

若い男の声が私の名前を呼んだ。

衛士だろうか。

助かったと思うと同時に公爵の手が離れていく。

手の早い公爵は、逃げ足も速いようで、すぐに立ち去っていった。

膝の力が抜けた私は、その場にガクンと崩れ落ちた。

頭ではちゃんと状況を理解しているつもりだったけれど、ポンコツな体は、勝手に震えていた。

足音が近づいてきて、私の前でピタリと止まった。

若々しくて、でも、少年とは違う低くて太い、大人の男性の音が頭上から降ってきた。

「おばさん、もてるね」

さっきの衛士の声と同じだ。

青年の手が肩に触れると反射的に私はビクンと大きく震えた。

「何もしないから」とあやすように言いながら、宰相様の息子は、私を立たせた。

舞踏会の夜は触られることすら怖れた腕の中にいるのに、私はなぜか安心感に包まれていた。

なんとか歩けそうだったので、「もう、大丈夫です」と言って離れようとしたら、長い腕で囲いをつくられた。

「離して」と言おうとした時、耳元に熱い息がかかった。

次の瞬間、信じられない言葉が私の耳たぶをくすぐった。

「おばさんさ、俺と婚約しない？」

——空耳かな。

私が固まったので、枯野は、私を解放すると、私を自分の方へ向かせた。

「あの、今なんておっしゃいました？」

妙に甲高い声でたずねると、また、愉快そうに目が細められる。

「俺と婚約しようよ。そうすれば、さっきみたいに絡まれることなくなるよ」

枯野は、放心状態の私の肩をポンと叩いた。

理解不能な思考回路を持つ男は、「とりあえず、考えておいてよ」と言い残して、立ち去ろうとした――が、一度振り返る。

「舞踏会の音楽は、気に入った？」

私が頷くと、満足げな笑みが返ってきた。

「あの楽団、俺が住んでいたところから連れてきたんだよ。特にヴァイオリンが良いんだ。きっと、おばさんは、すごく気に入ると思うよ」

5 (後書き)

フライデーナイトなので、少し短いです。

「ちょっと、牡丹さん！焼きりんごに醤油は、合いませんよ」

玉苗に手首を掴まれた私は、はっとして、今まさに焼きりんごにかけようとしていたらしき醤油差しをテーブルに置いた。

「ちょっと、ぼーっとしてました」

「しっかりしてくださいよ」

私は、玉苗の端正な横顔をちらりと見る。

「ねえ、玉苗。もしもなんだけど、セクハラされそうになった時、助けてくれた男性にいきなり婚約を申し込まれたら、どうしますか」
「ロマンス小説のヒーローですか。運命的に見せ掛けて、めっちゃ胡散臭いです」

「———ですよね」

昨夜の出来事を馬鹿みたいに脳内でリピートするのは、やめなければ。

食事に集中しようと、焼きりんごを口いっぱいに頬張った時、突然、玉苗がくすりと笑った。

「やだ。牡丹さんてば、枯野様にプロポーズされちゃったんですか」

ぶはっ

危うく口に含んでいた焼きりんごを吐き出しかけた私は、むせてしまい、ごほごほと咳をした。

やっぱり、とにんまり笑う玉苗。

「昨日お二人が中庭で密会していたって噂を聞いたから、かまかけたんですけど、図星みたいですね」

玉苗は、むせている私に水入りのコップを差し出しながら言った。
水を一気に飲み干すと、少し落ち着きを取り戻した。

大きく息を吐いてから、好奇心むき出しの玉苗に向き直った。

「このことは内密にお願いします」

玉苗は、頷いた後、「でも、返事はどうするんですか」と言った。

「散里様の方から断って頂くつもりです」

散里様の気を煩わせることなく、自分で返事をしたいところだが、相手の身分が高いので、作法上そうもできない。

「なんだか、勿体ないですね」

玉苗は、不満げに口をとがらせた。

昼食後、散里様の元へ出向いた私にとんでもない事態が待ち受けていた。

散里様は、はしゃいだ様子で私を迎えた。

「聞きましたよ、牡丹。枯野殿からプロポーズされたのね」

散里様は、口をぽかんとあけた私を嬉しげに見つめながら言葉を続けた。

「先程、枯野殿から文を頂きました。真摯な言葉で書かれた素敵なお文でしたのよ」

気を落ち着けるため、何度か深呼吸した後、私は口を開いた。

「反対なさらないのですか。枯野様と私では、身分が釣り合っていない」

散里様は、私の必死な言葉を一笑した。

「身分が釣り合っていないですって？古臭い考え方は、およしなさい。わたくしを御覧なさい。夫と結婚して、どれほど幸せだったか」

「でも、年が離れ過ぎています」

散里様は、何か珍しいものを見るかのような目で私を見た。

「あなたと枯野殿の年齢は、ふたつしか離れていませんよ」

私は、目をぱちくりした。

「枯野様は、25歳でいらっしゃるのですか。もっとお若いと思っ

ていました」

散里様は、ますます奇妙な顔をした。

「枯野殿は、29歳ですよ」

——世界がくるりと反転したような気がした。

私のことを「おばさん」と呼ぶ声が頭の中でこだまする。

散里様は、放心状態の私を訝しげに眺めた。

「まさかと思いますけど、あなた。断ろうと考えていたんじゃないでしょうね」

私が力なく頷くと、「まったく」と散里様は呆れたよう呟いた。

「何が気に入らないのかしら。見目も良く、家柄も良く、年も釣り合っているんですよ。何より、枯野殿は、あなたを好いていらつしやいます。よくお聞きなさい、牡丹。女は、愛されてこそ幸せになれるのですよ」

最後の言葉を諭す様な口調で言うと、散里様は、優しい手つきで私の頭を撫でた。

「あなたが枯野殿を怒鳴ったと聞いた時、私は少しほっとしました。気丈なあなたにもやっと心許せる相手ができたと思ったのよ」

「それは、誤解です」

激しく首を振ると、散里様に厳しい目で睨まれた。

「来週の夜会にあなたも連れていくつもりですから、もう一度枯野殿と話してみなさい」

私は、嫌だと言うことも出来ず、小さく頷いた。

軽快な音楽、楽しそうな談笑の声、美しく着飾った人々。

華やかな光景を前にしても、私の心はちっとも晴れなかった。

「浮かない顔だね」

「からかわれたと分かって、気分のいい人間なんていません」

そう言つて顔を上げると、黒いタキシードを着た枯野が立っていた。前髪を上げているせいか、大人びてみえるが、とても30歳を目前に控えているようには見えない。

「なにが、『おばさん』よ。あなたの方が『おじさん』じゃない」
小さく悪態をつくくと、枯野は、クスクスと笑った。

「普通に話しかけたら、相手にしてもらえないと思つたんだ。あなたが怒っているのは分かっていたけど、反応が面白くて、つい」

枯野は、隣に腰かけると、私の顔を覗きこんだ。

「牡丹殿と呼ばばいいかな。それとも、牡丹？」と甘ったるい声で聞く。

優美な笑みだけど、私には、胡散臭い笑顔にしか見えない。

「どちらでもお好きなように。もう二度と呼ぶ機会はないでしょうから」

つんと顔を逸らし、枯野から背を向けて、座りなおした。

「つれないね」と背後で呟く声が聞こえた。

私は、背を向けたまま、口を開いた。

「婚約のことですけど、お断りさせていただきます。本来なら、散里様に伝えて頂くべきなのですが、色々事情がありまして」

「散里様から俺との婚約を受けると言われたんでしょ」

枯野は、面白がっている口ぶりで言った。

「散里様があんなに気に入るなんて、どんな文をお書きになったんです」

「まず、あなたの人柄について触れた。少し臆病だけど、優しくて真っ直ぐな心根の持ち主だと書いたかな。それから、散里様が飛びつきそうな話題にも2、3触れたような。たとえば、正式な発表はまだだけど、宮廷勤めは決まったようなものだから、結婚した後も宮廷近くに住むつもりだとか。本人が望むなら、妻が女官の仕事を続けてもいいと思つていたりとか。子供が生まれたら、ぜひとも散里様に後見人になって頂きたいとか。あれ、耳赤いよ」

——なんなの、この人。

耳たぶをそつと触れられた私は、人目があるので、飛び上がることも出来ず、ただ椅子の上で硬直していた。

調子に乗った悪魔は、私の耳元で囁く。

「どうして決心できないなら、お試しでいいよ。春の除目までの3カ月間期間限定。3カ月経って、まだ結婚したくないと思っていたら、別れることも可能だ。もちろん、お試しの婚約であることは誰にも言わないし、ふられ役は、俺が演じる。どう？」

我慢できなくなった私は、くるりと振り向いた。

「どうして、そんな馬鹿げたことが考えつくんですか。たとえば3カ月であっても、私は、あなたみたいな人と婚約したくありません」
そう言い切った時、私は、はっと息をのんだ。

枯野の肩越しにちょうど到着したばかりの橘公爵と目が合ったのだ。私の顔色が変わったので、枯野も後ろをちらりと見る。

近づいてくる橘公爵に気付いたのだろう。

私に向き直った枯野は、愉快そうに目を細めた。

心を見透かしたような目は、いつも逃げ場のない私を追い詰める。

「相手は、腐っても公爵だ。あなたに拒否権はないだろうね」

枯野は、勝ち誇った笑みを浮かべて、私に手を差し出した。

「ここで、俺の手を取るかは、あなた次第だ」

——選択肢なんか、最初からひとつしかないじゃない。
ごくりと唾を飲みこむと、私は、差し出された手を取った。

6（後書き）

焼肉食べたり、バーレスク見たり、有意義な週末でした。

また頑張って書きたいです。

差し出された手を取った瞬間、グイッと手を引かれて、私は、枯野の腕の中にいた。

私達に近づいてきた橘公爵は、私の腰に回された腕をちらりと見た後、親しげな口調で枯野に話しかけた。

「今晚は、枯野殿。素晴らしい夜ですね」

枯野は、軽く会釈をすると、返事をした。

「今晚は、橘公爵。まったく最高の夜ですね」

橘公爵は、視線をずらして、枯野の腕の中で身を縮めている私を視界におさめた。

「宮廷に慣れるまで時間がかかる方もいらっしゃるようですが、枯野殿には、いらぬ心配のようだ。美しいご婦人を連れていらつしやいますね。ご紹介頂きますかな」

枯野は、ふわりと笑い、私を抱く腕に力を込めた。

「牡丹といえます。今しがた、私の婚約者になりました」

橘公爵の目が大きく見開いた。

余裕たつぷりに微笑む枯野を公爵は忌々しげに見た。

「思い出しましたよ」と公爵は言った。

「どこかで見たことがある顔だと思ったら、散里王女の女官ではありませんか」

ねつとりした視線が気持ち悪く感じて身を竦めると、枯野は、私の頭を撫でて、額に口づけを落とした。

私を自分のものだと言示するための演技だと頭では理解していても、頬が熱くなるのを感じた。

「そうです。王女に献身的に尽くすように、私のことも想ってください。女性です」

「ご冗談を。散里王女のお気に入りだといえども、所詮は女官でしょう。愚かな夢を見せるのは、残酷ではありませんか」

公爵は、苛々したように言った。

「勘違いをされているようですが、牡丹は、れっきとした伯爵令嬢です」

しれっとした顔で言い放つ枯野に気色ばんだ公爵は、人目も憚らず、声を荒げた。

「とても信じられませんね。不義を犯して、家を放り出された女の娘だ。伯爵は、一度も会いにきたことがないと聞きますよ。本当の娘ではないと思っているのでしょうか」

公爵の声は、大きくて、私の心いっぱい広がるほど響いた。

私の出生を知る人間は宮廷に多くないと思っていたのは、私の思い違いだったようだ。

公爵の言葉は大部分真実だったけれど、それだけに心をえぐられたような気分だった。

周囲から注がれる好奇の視線から逃れたくて、その場を離れようと身を動かした時、腕を強く掴まれた。

逃げるな、と言われていて気がした。

顔を上げると、橘公爵を見据える枯野の横顔が見えた。

いつも飄々とした印象を与える男は、別人のように冷たい空気を放っていた。

「牡丹は、私の婚約者です。私の婚約者を貶めるような言葉は慎んで頂きたい」

静かな、けれど、きっぱりと言った枯野は、私の腕を掴んだまま、夜会の会場を後にした。

人気がないところまでくると、枯野は、私の腕を離した———と
思ったら、抱き締められた。

「泣くんだ」

枯野は、命令するような鋭い声で言った。

「大丈夫です」と言って離れようとしたけれど、腕の拘束は強まるばかりだ。

枯野は、私の頭を自分の胸に押しつけて、髪を撫でる。

私は、拘束から逃れるのを諦めて、目を瞑った。

頭上から息遣いが聞こえ、硬い胸板の奥からドクンドクンと規則的な音が聞こえる。

枯野の腕は私を逃さない強固な囲いのはずなのに、不思議と恐怖を感じない。

考えてみれば、私には、誰かにこうして強く抱き締められた記憶がない。

母親の腕は、いつだって幸のだけのものだった。

幸はいつも安心してきつた顔をしていた。

今の私も同じ顔をしているのだろうか。

ふと気が付くと、目の前にある枯野の胸が濡れていた。

——雨だろうか。

いや、屋内に雨が降るはずはない。

私は、はっとして、頬に触れた。

熱くて、しっとりと濡れている。

「少しずつ。ゆっくり泣けばいい」

低い声が囁き、大きな掌が私の顔を包み、筋張った指先が頬を伝う熱い雫を拭う。

優しい仕草は、なぜか私を苛立たせた。

心を覗かれているようで。

「悲しくなんかない。誰も私を傷つけることはできない。これは、涙じゃない」

激しい口調で弁解すると、枯野は首を振った。

「母親を悪く言われたんだ。誰だって、泣きたくなるくらい悲しいことだと思っよ」

「そうなの」

「そうだよ」

枯野は、空が青いのは当然だという口調で言った。
だから、私は、泣いた。

心ゆくまで。

時間はまるで止まったように。

「頭痛い」

鼻声で文句を言うと、枯野は、私の額をそつと大理石の支柱に当てた。

ひんやりと冷たい感触に力が抜けていく。

泣き過ぎて、柱に頭をあずけたまま、私は、問いかけた。

「どうして、私と婚約したいの。私が大好きってわけでもないでしょう」

枯野は、「そうだな」と言った。

「春までに宮廷である程度の地位を確立したいと思っているんだ。

あなたは、王女のお気に入りだし、宮廷に10年もいるから、作法に詳しいだろうから、心強い。それから、俺は、宰相の息子だけど、春まで爵位をもらえない。婚約でもしなければ、3カ月間ずっと年頃の娘を持つ爵位持ちの親に遠慮なく追い回されるだろう。婚約者がいると非常に助かるんだ。あれ、がっかりした？」

私が一步後ろに下がったので、枯野は、首を傾げた。

私は、「いいえ」と答えた。

「打算的な理由でよかったと思いました」

そう言ってから、私は、宰相様の息子であり私の婚約者である枯野という名の男に手を差し出した。

「今日は、庇ってくださいありがとうございます。出来る限り、

あなたの野望に協力しますから、春まで頑張りましょう」

枯野は、少し驚いた顔をした後、目を細めて探るように私を見た。私は、にっこり笑ってやると、枯野もにやりと笑った。

私達は、握手を交わした。

7（後書き）

ゴールデンウィークなので、明日は都会に出ています。

大きな本屋さんに行きたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7509s/>

ゆきにぼたん

2011年5月5日00時57分発行